仏教を身近にする伝道誌　浄土真宗を弘める会

道標（どうひょう）

d o h y o

2021 冬季号

年間特集　「ふしぎ」

第一回・不思議なけれど　熊倉功夫さん

連 載

あなたのいのちの物語　感性解放と秩序の瓦解

伝承を科学する　霊験の視覚化－神仏の使い走りと早笛

道しるべ　お仏壇の前で

年間特集

「ふしぎ」

第一回
熊倉功夫さん

不思議なけれど

にこめられた「いぶかしいこと」の意味にひっかかります。いぶかし、は不思議ということです。「不思議だよ。花が咲いて今日は春だ。」当たり前のことです。秋になって桜の花が咲いたら、それこそ不思議ですが、春に咲くのは当たり前で、不思議でも何でもありません。しかし、それを不思議と思ったのが、北原白秋です。

北原白秋の薔薇（ばら）の木に、という短歌があります。

薔薇の木に薔薇の花さく
なにごとの不思議なけれど
（『白金之独楽』）

薔薇の木にチューリップの花が咲いたら、それは不思議なことです。薔薇の木に薔薇の花が咲いているのですから、文字通り、何の不思議もないのです。しかしそこに不思議を感じるというのは、どういうことでしょうか。一言でいえば、自然の不思議です。人間の存在をはるかにこえた、偉大な自然のはからいに気付いた時の感動ではないでしょうか。

その心を茶の湯では、とても大切にしたことが『南方録』という本に出ます。『南方録』一六九〇年に黒田藩士の立花実山が、千利休とはどんな人だったのか、と探求して書いた書物です。その中に、利休がわびの心を問われて、藤原家隆の歌を引用して説明しました。

その歌は「壬二集」にあります。

花をのみ待つらむ人に山里の
雪間の草の春をみせばや

（桜の花がいつ咲くかとそればかり待っている人に、山里の雪間に顔をのぞかせた草の春を見せたいものだ）

早春の山里にはまだ雪がところどころ残っています。その雪間の黒い土

＊

不審者というと疑わしい人のこと。怪しげです。もちろん「不審」にはその意味もありますが、中世の中国語では、単なる挨拶の言葉だそうです。「ご機嫌いかが」くらいの意味でしょう。「こんにちは。花が美いて春らしい日になりましたなあ」ということです。

ごく普通のご挨拶ですが、考えてみると深い意味がありそうです。不審

「不審花開今日春」

千利休は京都にきて大徳寺の門前に家を建てました。その中に四畳半の茶室を作り不審庵と命名します。その不審という言葉がどこからきたのかというと、どうやら、この「不審、花開いて今日春」の禅語によるといわれています。ただこの言葉の出典はわかりません。

不思議だよ。花が咲いて今日は春だ。

の中から、よく見ると春の芽が、早くも顔を出しているではありませんか。小さな草の芽を見つけて、ああ春がめぐってきた、と感動する心が「わび」であると『南方録』は主張します。草が芽生える前は雪一色の山里です。雪に埋み尽くされた世界は無一物の世界でもあります。

無一物ノ所ヨリ、ヲノヅカラ感ヲモヨホスヤウナル所作ガ、天然トハヅレ〳〵ニアルハ、ウヅミ尽シタル雪ノ、春ニ成テ陽気ヲムカヘ、雪間ノトコロ〴〵ニ、イカニモ青ヤカナル草ガホツ〳〵トニ葉三葉モヘ出タルゴトク、力ヲ加ヘズニ真ナル所ノアル道理ニトラレシ也

何も見えない雪の下から、ちゃんと春の来たのを感じとった草が芽を出してきます。みずみずしい緑の芽が、ホツホツと二葉、三葉あらわれる。ああしよう、こうしようというような人間の思惑など関係ない。作為のない世界にこそ真実なものがある。それが利休のいう道理です。

あるがままに　おまかせすること

小さな芽に春を感じた時の驚きが「不思議」に通じます。

人間という存在が微少なものであることに気付いた時、さらに微少な存在が、実に愛しく感じられます。それは雪間の草の春でもありますし、サトウハチローの詩「ちいさい秋みつけた」の心も同じです 小さい秋は、もずの声であったり、はぜの葉ひとつ、であったりします。そんな小さなものに、実はすべてが象徴されていることに気付いた時の感動こそ利休のいう「わび」ではないでしょうか。

＊

さきほど、自然のはからい、ということを申しました。人智を越えた自然の摂理は、薔薇の花のようにいつも優美なわけではありません。時に猛威をふるい横暴の限りを尽くします。しかしそれも自然のはからいです。そこからわれわれはまた学びます。今も世界中を震撼させている新型コロナも自然のはからいです。それに対して、手を尽したのち、まかせるほかありません。

雪間の草やもずの声に不思議を感じ、自然のはからいにまかせることができたら、自然界にないものを作ったり自然を支配しようとは思いますまい。

私は今、つくづくと思うのですが、あるがままにおまかせすることがいかに大事か、と。

＊写真　足田輝一

熊倉 功夫（くまくら いさお）
１９４３年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長などを歴任し、現在MIHO MUSEUM（ミホ ミュージアム）館長、国立民族学博物館名誉教授。２０１３年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』、『茶の湯といけばなの歴史 日本の生活文化』、『後水尾天皇』、『文化としてのマナー』、『現代語訳 南方録』、『茶の湯日和　うんちくに遊ぶ』、『日本人のこころの言葉　千利休』、熊倉功夫著作集（全7巻）等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

Your Spiritual Stories
あなたのいのちの物語

17話目

「感性解放と秩序の瓦解」

トーマス・マン『ヴェニスに死す』

主人公グスタフ・フォン・アシェンバハは五〇歳代で、ドイツの高名な作家だ。妻に先立たれ娘も嫁いでミュンヘンで一人暮らしをしている。功なり名を遂げ貴族の称号まで得、模範的文化人として地位を高めてきたものの大きな欠落があると感じ、地中海方面に旅に出る。そしてヴェニス対岸のリド島に泊まってヴェニスの街や島の海岸で無為な日々を過ごす。

島のホテルではさまざまな国々の人々が保養の日々を送っているが、作家は三人の姉と家庭教師とともに滞在している二四歳ぐらいの美しいポーランド人の少年の美しさに「唖然とした」。「蒼白く優雅に静かな面持ち、蜂蜜色の髪の毛にとりかこまれ、鼻筋はすんなりとして口元は愛らしく、やさしい神々しい真面目さがあって、ギリシア芸術最盛期の彫刻作品を思わせた」。

姉たちは服装もふるまいも地味だが、少年は違う。「明らかに柔弱と甘やかしとが男の子の生活を規定している」。「鋏を加えることを差控えたらしい美しい髪の毛は、「とげを抜く少年」像そのままに額へ垂れ、耳を覆い、さらにうなじに伸びていた。たっぷりとした袖が下へ行くに従って狭く細くなって、まだ子供々々した、しかし花車な手の手首にぴったりとついている英国風の水兵服は、その紐やネクタイや刺繍などで、この少年のなよやかな姿にどことなく豊かで豪奢な趣を添えている」。

「とげを抜く少年」像は紀元前四五〇年頃に作られイタリアから出土したもので、足のとげを抜こうとしている美しい少年の彫塑像だ。少年の官能的な美しさの描写は、地中海と連想される感性の解放・美への陶酔と関わっている。元来、享楽を好まず、「お祭騒ぎをしたり、休息したり、面白い目を見たりするようなめぐり合せになると、彼はたちまち――ことに若い頃はそれがひどかった――不快になり落着かなくなって、自分の日常の高貴な労苦の中へ、神聖で味気ない奉仕生活の中へ帰りたくなるのであった。ただこのヴェニスという土地にかぎって、彼を魅了し、彼の意欲を弛緩させ、彼を幸福にした」。

作家はそこから逃れようと試みもするがタイミングを逸し、ますます美しい少年への憧れに浸っていく。「太陽は顔と手を黒くし、刺激的な潮風は感情の力を強くした。これまで彼は、睡眠や食事や自然などが贈ってくれるエネルギーはすべてこれを直ちに創作に振向けてきたのであるが、今では太陽や閑暇や潮風が毎日供給してくれる精力の一切を陶酔と感受とに惜しげもなく不経済にも振向けた」。

作家は少年に話しかけることもできない。だが、少年への愛に酔う日々を過ごす。ところがいつしか、保養に来ている人々が減っていく。接客の人々は真実を明かさないが、実はコレラがひたひたと迫ってきている。だが、作家はベニスを逃れる意欲をもつことができず、コレラに罹患し少年の姿を追いながら死んでいく。

愛には官能的な解放が伴い、プラトンも示唆するようにそれこそがこの世を超えるものへの憧れともなりうる。だが、それは破壊的な作用をもたらしもする。ニーチェやワグナーの影も見える。二〇世紀の西洋文明がはまっていく陥穽を象徴する物語のようにも思えるし、スペイン風邪と現代のパンデミックを予感した作品のようにも感じられる。

島薗 進（しまぞの すすむ）
1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院グリーフケア研究所所長。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生――帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを〝つくって〟もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学する

霊験の視覚化―神仏の使い走りと早笛

霊験とは「人の祈請に応じて神仏などが示す霊妙不可思議な力の現れ、利益」（『大辞泉』）で、ふつうは目に見えないものだ。その霊験を、派手な仮面と衣装を着けたキャラクターの登場によって視覚化する能がある。その視覚化には、場面の雰囲気を作り出す、特徴的な登場音楽が欠かせないのである。

〈小鍛冶〉を紹介しよう。有能な刀職人である三条小鍛冶宗近（ワキ）に、剣を打って帝に献上せよ、との命令がくだる。宗近は恐れ入り、自分と同等に作業ができる者、つまり相槌を打つことのできる者がいないので断ろうとするが、受け入れられない。思い悩んだ宗近は、神の力を頼み、奇特を得るしかないと考え、祈願のために稲荷社に向かう。

その途上で、謎の童子（シテ）が宗近に声をかける。なぜか、宗近に課せられた任務を、すでに知っている童子は、中国の漢や唐の名刀、日本のヤマトタケルを助けた草薙の剣の威力などについて、畳みかけるように物語る。その上で宗近に、安心して作業に取りかかるように、と告げて稲荷山に消える。

帰宅した宗近はさっそく、作業場に祭壇を設け、神々に祈願するための祝詞をあげ、幣帛を振る。すると突如、宗近の前に稲荷明神の使い走りである小狐が現れる。小狐が、宗近の相槌を打つことで、剣は無事に完成し、帝に献上された。そして小狐は消えていった。

注意したいのは、霊験を舞台上で具体的に見せてくれるのが、神仏そのものではなく、神仏の使い走りである、という点だ。舞台上での使い走りの活躍は、この作品に限らない。たとえば、〈谷行〉では、深い谷に落とされた子供が、最後に登場する役行者によって救い出されるのだが、舞台で動くのは、目には見えないはずの、使い走りの鬼神である。〈竹生島〉では、弁財天が現れて、客人に宝物を進呈するが、実際に動くのは、その使い走りである龍神である。

使い走りの登場に必ず用いられる音楽が、早笛である。ときにハシリとも呼ばれる。急迫したテンポの音楽で、笛は高音で細かく揺れる旋律を繰り返し、太鼓は強く激しい掛け声でリズムに勢いをつける。ハシリという別名が示すとおり、神仏の使い走りは、舞台に走り込むかのように登場し、あれよあれよという間に仕事を終えて、あっという間に去っていく。

このような、使い走りの動きの素早さは、霊験を視覚化する能の大きな特徴のひとつである。その素早さを舞台上で生み出すために、早笛は大きな効果をもっている。

〈小鍛冶〉は、私自身も制作にかかわったスタンフォード大学のHP、Noh as Intermediaにおいて見ることができる（ただし説明の文章はすべて英語）。そのトップページの上にあるplayというタブからkokajiを選ぶ。あるいはNoh as Intermediaにkokajiやhayafueを合わせて検索していただけると、早笛の演奏だけを取り出して聞くこともできる。

〈小鍛冶〉使い走りの小狐が、宗近の刀鍛冶に相槌で加勢する場面
シテ、稲荷明神の使い：宇高竜成、ワキ、小鍛冶宗近：有松遼一
2017年6月17日、金剛能楽堂における上演

藤田 隆則（ふじた・たかのり）
一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

天岸浄圓（あまぎし じょうえん）
1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。

お仏壇の前で

一口に仏壇といっても、京仏壇、大阪仏壇など、各地で個性豊かな仏壇が造られてきた。豪華な金仏壇、渋好みの唐木仏壇、シンプルな現代仏壇など、ついには「仏壇じまい」の言葉まで。都会の住宅事情なのか信仰心か、最近は小型のものが好まれているそうだ。

私は大阪で生まれ育ち、寺の所在地も大阪市内の東南の端にある。付近は戦災に遭わず戦前からのお仏壇を伝えるご門徒が何軒かある。大阪仏壇の特色は欄間の彫り物にある。最近は「花鳥」「瑞雲」「天人」など、各宗に通用するデザインが多い。ところが戦前から昭和の三〇年代頃のお仏壇には人物が配されたものが多い。よく見ると物語になっている。「中国の故事」や「阿弥陀経の六鳥」、特に親鸞聖人の「山伏弁円の済度」や「川越の名号」「枕石寺」など、今では真宗門徒が忘れているようなテーマである。

孫を膝にのせておじいちゃんが、仏壇の欄間を指さして「これはな〈板敷山〉というお話じゃ、親鸞さまを殺そうとした板敷山の弁円という山伏が、聖人のご勧化でお弟子となった場面じゃ」。「こっちはご開山さまが一夜の宿を借りられた。翌朝、ご出発の後になって宿の主人がご開山さまだと知ってな、せめてありがたいお言葉をと、紙をもって追っかけたのじゃ。しかしご開山は川を渡られて向こう岸だった。そこで主は「親鸞さまとは知らずお泊まりいただきました。せめてご縁に一筆いただきたいと参りました。まことに残念でございます」と声をおかけしたのじゃ。するとご開山さまは「紙を私の方へ向けなさい」と仰って、矢立から筆を出されて宙に「南無阿弥陀仏」とお書きになった。なんと不思議に「南無阿弥陀仏」が主の紙に写ってくださったのじゃ」。

ナンマンダブ　ナンマンダブ。

編集後記

令和三年もコロナで明け暮れた。これからどうなっていくのだろう。漠然とした不安、不穏、不確実というのが今の空気であろう。

しかし「諸行無常」人がどう言おうとも、どう思おうとも時は過ぎていく。次第に安心、常なる聖なるものを求めていく。それも人の当然の心情ではなかろうか。

さて今回の年間特集のテーマは「不思議」である。「不思議」といえば有名な歎異抄第一条、「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をば遂ぐるなり」が連想される。「不思議」誰しもよく知っている言葉である。しかしそれはまた一方、人が知らぬ奥深い世界を表現する言葉でもある。

第一回目、熊倉先生によって見事にその世界を我々に示していただいた気がする。閉ざされているものが開かれた思い。一種の清涼感を覚える。当たり前であったものが当たり前ではない現在、当たり前のことを「不思議」といただく心こそ、今求められるものではないかと思われる。

合掌

表紙の絵　逆さ竹林の親鸞

今年の夏は暑かった。その分、冬は寒くなるだろう。越後は雪深いところもあるが、海岸線は強風で雪が横に飛び、そのため雪が積もらず松も地を這うように育っているところもある。

親鸞越後の七不思議がある。変種の植物など自然界やありえない出来事などであるが、そういう伝説が生まれたことに人々の親鸞に対しての敬愛を深く感じる。このことは私自身の目で巡ってみて感じたことである。所々枝が下方を向く現在の逆さ竹の林は美しい。しかし長い雪の季節の越後は厳しい。

現在残っている親鸞像は全て老年の像である。越後に流罪にあい信心が決定（けつじょう）した壮年期の雪やけをした人間親鸞を描きたかった。親鸞聖人が浄土真宗の宗祖であることを改めて学ばねばならない。

畠中光享（はたなか こうきょう）
日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい
株式会社 廣瀬佛檀店
0120-81-7065　06-6771-7007
タウンページ http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点　西へ30m）

仏教を身近にする伝道誌 道標 二〇二一年 冬季号 2021年12月1日発行 発行所／浄土真宗を弘める会 萬福寺内 大阪市西区南堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail：ktda8.10@gmail.com